

後期マムルーク朝社会におけるワーイズの実像

—— 人気説教師クドゥスィーの場合 ——

塚 田 絵里奈

はじめに

中世（10-15世紀）アラブ社会，特にマシュリク諸都市におけるイスラームの説教及び説教師については，少なからず論考が存在する [Goldziher; Pedersen 1948; Pedersen 1953; 'Athamina; Talmon-Heller]。とりわけ J. バーキーによる一連の研究は，私的説教の担い手である民間説教師を宗教的知識の伝達という観点から包括的に論じ，民衆の理解したイスラームのあり方をも問題とした点で画期的であった [Berkey 2001; Berkey 2002]¹⁾。また近年では長谷部史彦氏により民間説教師の一形態であるワーイズ wā'iz の民衆運動における指導性が指摘され [長谷部 2004: 166-167]，B. ショシャンによってスーフイズムの拡大と深化の過程における民間説教（ワアズ wa'z）の影響が具体的に提示されるなど [Shoshan 2006]，ワーイズの持つ社会史研究上の重要性に対する認識は多くの研究者の間で共有されつつある。それにもかかわらず，彼らの実態を踏まえての議論は不当に少ない。その主たる原因は，ワーイズ，カーッス qāṣṣ，ムザッキル mudhakkir などの用語で示されるハティーブを除いた説教師の諸形態が“popular preachers”として同列に論じられてきた点にある。バーキーは「中世近東」における民間説教師を指す用語間にある程度の互換性があったと主張するが [Berkey 2001: 14]，彼らの実態解明に繋がる事例蓄積が不十分な現段階においては，まず考察時期や地域を限定した上で議論すべきである。また，先行研究の大半が民間説教の是非をめぐる論争書を用い，民間説教師全体の「逸脱」的側面を強調することで保守的ウラマーと二分法的に対比させているが，彼らの存在形態をより客観的に把握するには同時代の年代記や名士伝記集を中心に据えた分析が不可欠である。そしてワーイズ研究における現今最大の問題点は，説教師個人のライフ・ヒストリーに焦点を当てた具体的考究の決定的不足である。著名なワーイズの生涯を全体として取り上げ，同時代社会に定位する作業は「ワアズの社会史」を考える上で極めて有効な手法であるにもかかわらず，中世後期については大きく欠落している²⁾。

1) Berkey 2001 の問題点については，下山伴子氏による書評及び拙稿を見よ。

2) アッパース朝期についてはイブン・アルジャウズィー（1116-1201）の説教論を扱った Swartz

そこで本稿では中世民間説教師の総合的な実態解明に向けた一つの試みとして、15世紀の人気ワーイズ、アフマド・アルマクディシー Shihāb al-Dīn Aḥmad ibn 'Abd Allāh ibn Muḥammad al-Mījdālī al-Maqdisī al-Shāfi'ī (d. 1466)、通称「アブー・アルアッバース・アルクドゥスィー Abū al-'Abbās al-Qudsi」に焦点を当てる³⁾。サハーウィー (d. 1497) による15世紀の名士伝記集『9世紀の人々の輝く光』[*Daw'*] に収録された約12,000件の事例から、ワアズに携わった人物として114名が確認されるが、クドゥスィーは他の史料を含め、抜群の記述量を示す好事例である⁴⁾。彼は「当代のイブン・アルジャウズィー」と評され、当時最も優れたワーイズの一人として広く社会に認知されていた。このようにワーイズとしての活動が特に顕著であったアーリムの実像を把握することは、ウラマー研究に資するのみならず、ワアズとワーイズの社会史的研究において不可欠の研究視角であると考えられる。

本稿の目的は、マムルーク朝後期(1382-1517)を代表する有力ワーイズ・クドゥスィーの生涯を未校訂史料を含むアラビア語年代記、地誌、名士伝記集に基づき再構成し、その実像を社会的諸関係に力点を置きつつ照射することにある。以下ではまず彼の経歴を概観し、同時代の歴史家たちによる人物評価を参照することで、人気ワーイズの人物像に迫る。続いてヒジュラ暦845年にメッカで生じた訴訟事件を中心に、度重なる有力ウラマーとの係争を社会的背景を含め詳論することで、同時代の知識人社会における彼の位置を探ることにした。

I クドゥスィーの経歴

まずは最も詳細な情報を伝えるサハーウィーの記述を中心に、彼の経歴を整理しよう [*Daw'* 1 : 363-366]。

クドゥスィーはアシュケロンに程近いシリアの地方都市ミジュダル Mījdal に生まれた⁵⁾。生年については諸説あるが、813/1410-11年が有力である⁶⁾。彼の出自に関する情報は見当たらないが、ピカーイー (1406-1480) の年代記に彼の親族とミジュダルの地方名家間の

↙ 1983及びSwartz 1986を参照。

3) クドゥスィーに焦点を当てた先行研究は見当たらないが、Popper : 376及びShoshan 1993 : 12に当該時期の有名ワーイズとして、名前のみが言及されている。

4) *Daw'* にみえるワアズとワーイズについては、紙幅の都合上、稿を改めて論じる。

5) ミジュダルについては *Mu'jam* 5 : 56-57を見よ。なお、*Rawḍ* : 120 a はクドゥスィーの出身地をエルサレムとしているが、誤りである。

6) *Nujūm* 16 : 347; *Badā'i* 5 : 161; *Nayl* 6 : 236; *Rawḍ* 729 : 120 a においてもヒジュラ暦813年とされる。*Daw'* 1 : 363には、クドゥスィーの生年をヒジュラ暦800年、809年、815年とする説に言及があり、*Uns* 2 : 141は809年としている。

抗争に関する記述があることから、有力家系の出身であったことが窺われる [Iḡhār 1 : 293]。

幼少期のクドゥスィーはミジュダルのカーディーであったマフムード・ブン・ハヌーン al-Jamāl Maḥmūd ibn Ḥanūn らに師事し、コーラン発音・発声法 tajwīd を学んだ。続いて複数のシャーフィイー派法学書、文法書を学び、ミジュダルにおけるウラマーの「集団」(ジャマーア jamā'a⁷⁾) に対し、それらを披露した 'araḍa。弟のハリール (1421/ 22 - 1493) も同じくミジュダルに生まれ、兄のもとでシャーフィイー派法学書を学んだとの記述がある⁸⁾。

さらなる学問の修得を志したクドゥスィーは、ガザ、ラムラ、エルサレム、ダマスカスを旅し研鑽を重ねた。続いて向かったナーブルスにおいて、838/ 1434 年、息子ムハンマド⁹⁾ が誕生する。彼は息子を伴ってカイロへと向かい、イブン・ハジャール・アルアスカラーニー (1372 - 1449) ら当代一流のウラマーに師事した。844/ 1440 - 41 年にはメッカ巡礼に向かい、聖地逗留者 (ムジャーウィル mujāwir) として勉学に勤しんだ。

Daw' によれば、この間に彼は法学 fiqh, 法源学 uṣūl, コーラン読誦学 iqrā', コーラン注釈学 tafsīr, アラビア語諸学 'Arabiyya, 相続法学 farā'id, 数学 ḥisāb, 韻律学 'arūḍ, 文法学 naḥw, 言語学 lughā, 説教論 wa'ḡを修めており、少なくとも 33 名のウラマーに師事したことが確認される¹⁰⁾。とりわけハディース学に専心し、大家であるイブン・ハジャールの講義に熱心に参加した。師のイZZ・アッディーン・アルクドゥスィー al-'Izz 'Abd al-Salām al-Qudsi (d. 1446) は、「ハディースの知識 ma'rifa とその真贋の区別、その他の学問分野 funūn に関して、イブン・タイミーヤよりも多くを修得した」と称賛したという [*Daw'* 1 : 365]。クドゥスィーはこの学問修得の過程において「エジプト、シリア、メッカ、そ

7) マムルーク朝末期の法行政官が形成するジャマーアに関しては、三浦徹：7-11 に詳論されている。

8) 彼の経歴については *Daw'* 3 : 198-199 に最も詳細な言及がある。彼はミジュダル、ダマスカス、トリポリ、カイロで学び、ナーブルス、サファドでカーディーを務めた。871/ 1467 年の末、エルサレムのカーディー及びサラヒーヤ学院のムダッリスに就任する際、前任者であるムハンマド・ブン・ジャマーア Muḥammad ibn Jamā'a (b. 1429) を強引に解任した。なお、彼のラカブは *Uns* 2 : 117, 288 では「ガルス・アッディーン Ghars al-Dīn」であるが、*Kawākib* 1 : 25 は「イZZ・アッディーン 'Izz al-Dīn」としている。

9) 「イブン・アブー・アルアッバース」として知られ、ラムラでカーディー職を務めていた。クドゥスィーよりアクサー・モスクのハティーフ職を譲り受け、869 年第 9 月 7 日 / 1465 年 5 月 2 日にフトバを行なった [*Uns* 2 : 117]。

10) *Daw'* 1 : 363-366 にはサハーウィーを含め、30 名のウラマーの名が師として挙げられている。また、*Daw'* に収録されている伝記記述の中で 8 名のウラマーについてはクドゥスィーがその人物のもとで研鑽したとの記述があり、クドゥスィーの伝記において言及されている人物との重複を除くと合計 33 名となる。イブン・タグリー・ビルディーは *Nujūm* 16 : 347 においてクドゥスィーが彼にイジャーザを求めたとの記述を残しており、彼もまた師の一人であったことが分かる。

の他の地域における当代の主要なシャイフたち ghālib mashāyikh に学び、「大変な努力を重ね、名を上げた」[*Daw'* 1 : 364] 結果、イブン・カーディー・シュフバ (1377-1448)¹¹⁾、アラム・アッディーン・アルブルキーニー 'Alam al-Dīn Ṣālih al-Bulqīnī (1388/89-1464)¹²⁾ ら、著名なウラマーからコーラン読誦、教授 *tadris*、ファトワー作成 *iftā'* の免状 (イジャーザ *ijāza*) を獲得した。さらに独学でも研鑽を重ねたという¹³⁾。

職歴として確認されるのは、エルサレムで最も権威ある高等教育施設であるアクサー・モスクのハティーブ職、ムダッリス職とサラヒーヤ学院 al-Ṣalāhiyya における助手 (ムイード *mu'id*) 職である。カイロでは前述のブルキーニーの副カーディーを務めたが、ダマスカスでは複数回に及ぶカーディー職就任の打診を辞退したという。エルサレムの歴史家ウライミー al-'Ulaymī (1456-1522) が「ファトワーを記す筆跡は美の極致であった」と述べていることから [*Uns* 2 : 141]、ムフティーとして活動し、能書家でもあったことが分かる。

836/1432-33年、エルサレムにおいて初めてワアズ集会 *majlis al-wa'z* を開いたクドゥッシーはたちまち頭角を現し、ワアズの「第一人者となり、大変裕福になった」[*Daw'* 1 : 364]。「ダマスカスの人々 *ahl Dimashq* は彼に多大なる愛情と称賛を注いだ」[*Daw'* 1 : 365] ほか、マシュリク諸都市で民衆から有力者に至る幅広い人気を獲得したが、特に女性からの支持を集めた [*Inbā'* 4 : 182, *Rawḍ* 729 : 120 a, *Tibr*, 17]。また、文書庁長官 *kātib al-sirr* のイブン・ムズヒル Zayn al-Dīn Abū Bakr ibn Muzhir (1428-1488)¹⁴⁾、大ダワダール *dawādār kabīr* のヤシュバク・アルファキーフ Yashbak al-Faqīh ら、政府高官によるパトロネージを受けたことで彼のワーイズとしての名声は一層高まり、さらなる富をもたらす結果となった [*Daw'* 1 : 366, *Nujūm* 16 : 347]。

844/1440-41年メッカに到着したクドゥッシーは、学問修行の傍らワーイズとしても精力的に活動を行い、「民衆 'amma や一部の貴顕 *khāṣṣa* も彼のもとに参集した」[*Inbā'* 4 : 182]。しかし翌 845/1441-42年、後述するように、メッカのシャーフイー派、マーリク派カーディーによってクドゥッシーを「不信仰 *kufr*」とする告訴状 *maḥḍar* が提出され、ワアズを禁じる裁定が下されるという事件が起こる。また 857/1453年には故郷ミジュダル

11) タキー・アッディーン・アブー・バクル・ブン・カーディー・シュフバ Taqī al-Dīn Abū Bakr ibn Qāḍī Shuhba。主にダマスカスで活躍し、1438年から40年まで大カーディーを務めた。彼の経歴については Schacht を参照。

12) ブルキーニー家については Gibb 及び伊藤 : 331-342 を参照。

13) *Daw'* 1 : 366 によるとクドゥッシーは複数の著作を記しており、スブキー Taqī al-Dīn Abū al-Faṭḥ Muḥammad al-Subkī (1304-1343) の「カリフの列挙 *ta'dād al-khulafā'*」に関する論説の注釈 *sharḥ* を記し、サハーウィーに伝達したという。このスブキーの著作は *Uṛjūza* を指すとみられる [Brockelmann S-2 : 26]。

14) *Daw'* 11 : 89 には彼がクドゥッシー以外にも複数のワーイズを保護していたことが記されている。官僚名家ムズヒル家については Martel-Thoumian : 267-281 を参照。

における訴訟に敗れ、短期間ではあるが、カイロのラフバ牢獄 Sijn al-Rahba に投獄される憂き目も見た。

メッカの訴訟事件以降もクドゥスィーはカイロとエルサレムを中心とするシリア諸都市でワーズとしての活動を続けていたが [Rawḍ 729: 120 b], 870年第6月26日/1466年2月12日、長い闘病生活の末カイロにて亡くなり、翌日小カラーファ地区に埋葬された [Rawḍ 729: 120 b; Daw' 1: 366; Nujūm 16: 347; Nayl 6: 235-236; Badā'i' 5: 161; Uns 2: 141; Hawādith 1: 173; Wajiz 2: 775]。

II クドゥスィーの人物像

続いて、卓抜した技能と人気を備えたワーズ・クドゥスィーの人柄やアーリムとしての資質を同時代の史料記述に拠りながら照射し、ウラマー社会における位置を検証しよう。

ウライミーは9/15世紀中頃のエルサレムにおける「権威あるウラマーやシャイフ・アルイスラームの名士たち a'yān からなるジャマーア」の構成員としてクドゥスィーの名前を挙げ [Uns 2: 116]¹⁵⁾, 「[学問の探求において] 傑出し、法学者 fuqahā' やサラーヒーヤ学院のムイードのような名士の一員となった」と述べている [Uns 2: 141]。彼がエルサレムのウラマー社会において非常に高い名声を獲得していたという点に、まず注意を払わねばならない。

医学を志したアンダルスへの旅で知られるマラティー 'Abd al-Bāsiṭ al-Malaṭī (1440-1514) も、「彼は知に専心し、ジャマーアから学び、学業 ishtighāl において真摯かつ勤勉であったために傑出し、並外れた資質を備えるに至った」 [Rawḍ 729: 120 a] とアーリムとしてのクドゥスィーに賛辞を呈した上で、彼のワアズ集會を次のように伝えている。

集會は親しみやすい雰囲気で行なわれた。彼のワアズは反響が大きく、説教(タズキール *tadhkir*¹⁶⁾) においてハディースを引用しコーランの注釈を行うことによって、多大なる影響力を行使した。また、聖者の奇跡譚 *karāmāt al-ṣāliḥīn* とそれにまつわる物語 *ḥikāyāt* や情報 *akhbār* をふんだんにワアズに取り入れた。彼はカイロで大勢を集めた講義(ミーアード *mī'ād*) と大規模な集會を開き、多くの人々 *khalq kathīr* と市民 *nās* からなる群衆 *jam' ghafir*, とりわけ女性が集まった [Rawḍ 729: 120 a]。

クドゥスィーがハディースやコーランを平易な表現で説き、聖者伝を好んで用いたこと、それに対する聴衆の反応が極めて大きかったことが読み取れる。マラティーが *Nayl* で「不幸 *ankād* と災難 *khuṭūb* が繰り返し彼を襲った」 [Nayl 6: 235-236] とクドゥスィーの

15) 同様の記述は、*Kawākib* 1: 24-25 にもみられる。

16) 原義は「想起させること」であるが、聴衆に神の存在を想起させるための訓戒の説教を指す。

生涯を総括しながら、より浩瀚な *Rawḍ* では彼自身を「その時代の諸災禍の中の災禍であった」[*Rawḍ* 729: 120 a] と評している点は、数々の有力ウラマーとの衝突を経験した彼をトラブルメイカーとして否定的に捉えていたと解釈できる。ここで「不幸」と「災難」と表現された出来事が具体的に何を意味するのかは、後に詳しく検討することにしてしよう。

他方、イブン・タグリー・ビルディー (d. 1470) は、クドゥスィーの死亡記事の中で「彼は古典 *qadīm* を学び、ワアズ、タズキール、ミーアードを行なうことに優れた」と述べ、「そのタズキールは印象深いものであった」と、やはり彼の説教を高く評価している [Nujūm 16: 347]。彼が広く受け入れられた要因を「親しみやすく、ハディースやコーラン注釈学、聖者の奇跡譚に関する記憶に優れていた」とする点は、ワアズ集会に関するマラティーの記述と一致している。

そして、カイロのウラマー社会におけるクドゥスィーの評価を以下のように語っている。

人々は彼を肯定的に捉える者と否定的に捉える者の二者に分かれたが、後者が大多数を占めていた。私自身は、彼とハーフィズであり碩学 'allāma のブルハーン・アッディーン・アルビカーイーとの一件がなければ前者の立場であった [Nujūm 16: 347]。

エルサレムにおける指導的アーリムとの位置づけとは対照的に、カイロのウラマーの大半がクドゥスィーに対して否定的見解を示していたことが読み取れる。「ビカーイーとの一件」とは、クドゥスィーが彼に託した多額の現金をめぐる訴訟を指す¹⁷⁾。両者が大ダワダール・ヤシュバク・アルファキーフに競って訴え、「それに言及すること何ら価値のないほど、互いを罵り合った」[*Rawḍ* 729: 120 b] ことで事態は泥沼の様相を呈し、クドゥスィーに対する評価を結果的に低下させたとみられる。

クドゥスィーの人物像を最も具体的に伝えているのは、師のサハーウィーである¹⁸⁾。彼はまず「際立った知性と記憶の鋭さを持つ人物であったがゆえ、それ(ワアズ)においては余人の追隨を許さなかった」[*Daw'* 1: 364-365] と評し、その理由を以下のように挙げている。

すなわち、サフティー *al-Saftī*¹⁹⁾ の前でジャウハリー *al-Jawhari* 著『スィハーフ *Ṣiḥāh*』²⁰⁾ の 50 行を 2, 3 回で記憶してしまったこと、コーラン注釈学やハディース、

17) この訴訟事件については、*Rawḍ* 729: 120 a-120 b; *Daw'* 1: 365-366; *Tibr*: 18 のいずれも簡潔な言及に止まっており、経緯が詳らかでない。またビカーイー自身も各都市のウラマー社会において論争と対立を繰り返した人物であった。彼の経歴については、Li Guo: 121-124 を参照。彼とスューティー *Jalāl al-Dīn al-Suyūṭī* (1445-1505) のイブン・アラビーをめぐる論争については、東長靖氏が詳論している。

18) *Daw'* にはクドゥスィーを典拠とするミジュダルのウラマーの伝記が 4 件収録されており、両者が頻繁に交流していたことが窺える。

19) サフティー *Walī al-Dīn Muḥammad ibn Aḥmad al-Saftī* (d. 1451) はシャーフィイー派法学者、コーラン注釈学者として知られる。スルタン・ジャクマクと親交があり、1447-48 年、エジプトの大カーディーを務めた。

20) ジャウハリー (d. 1002/03?) によるアラビア語大辞典、『言葉の王冠とアラビア語の正用法』

法学、法源学、アラビア語学について多くを想起し得ること、文章を記憶すること、古い詩歌 *ash'ār al-qadima* をはじめ多くの文章を豊富に〔説教に〕取り入れること、古い詩歌にまつわる物語 *ḥikāyāt* や逸話 *nawādir* を多用することである [Daw' 1 : 365]。

ここで「イスラーム諸学への精通」や「優れた記憶力」など、ワーイズに要求される能力が明示されている点に注意を払っておかなければならない。また、古典詩とそれに関連する物語をワアズに取り入れることが評価されている点も興味深く、これらは彼の説教を構成する主要な題材であったと考えられる。そしてサハーウィーは「彼のワアズ集会は最高水準のものであった」[Daw' 1 : 365] とクドゥスィーが当時最も優れたワーイズの一人であったことを強調し、その人物像を次のように描写している。

彼はその発言や行動に軽率さが見られるほか、狡猾で他者に阿る人物であるため、ウラマーとしての優美さやワーイズの範となるべき資質に欠ける。また、[他人の] 注意を喚起し、傍らを通りかかる人々の関心を引くことに長じているが、彼が示すものの大半において、[人々は] 躊躇してしまうのである。だが、真実 *ṣidq* を追究する際に発揮されるその素質に並ぶ者はなかった。[Daw' 1 : 364-365]。

サハーウィーは学問の探求におけるクドゥスィーの独創性を肯定的に捉え、人々の関心を引くことに長けているとする一方で、発言や行動に軽率さが見られるがゆえにウラマーやワーイズの模範となる人物ではないと、厳しい評価を下している。

そして当該時期のウラマー社会におけるクドゥスィーの位置を探る上で見逃せないのが、ビカーイーのみが伝える 857/ 1453 年のミジュダルにおける訴訟事件であり、その概要は以下の通りである [Iḥār 1 : 293-295, 300]。

856/ 1452 年頃、クドゥスィーの親族と、彼らに敵対するミジュダルの名士 *kabir*、イブン・カザービル *Ibn Qazābir* 率いる集団 *tā'ifa* との間に、金銭をめぐる大規模な抗争が展開された。クドゥスィーはイブン・カザービルに対する告訴状を作成してナーブルスのカーディーに提出し、弟のハリールを王領地監督官 (ナーズィル・アルハッス *nāẓir al-khāṣṣ*) のユースフ・ブン・カーティブ・ジャカム *Yūsuf ibn Kātib Jakam* (1416/ 17-1458) のもとへ派遣した。それと同時期、エルサレムのナシャービー *Muḥammad al-Nashābī* はカーディーのイブン・アッダイリー *Amin al-Din 'Abd al-Raḥmān ibn al-Dayrī* (1414-1452) の要請を受け、訴訟の実態を調査していた。その結果、告訴状の内容に虚偽があることが発覚したため、ナシャービーはナーブルスのカーディーに告訴状の撤回を求め、ハリールを投獄した。しかしクドゥスィーはすでにカイロへ逃れ、ナシャービーらの中傷し、カイロのマーリク派大カーディー・サンバーティー *Walī al-Dīn Muḥammad al-Sanbāṭī* (1385/

↙ *Tāj al-luḡha wa ṣiḥāḥ al-'Arabiyya*』を指す。

86-1457) に対し、イブン・カザービルを訴えた。有力な証言を得られなかったイブン・カザービルは、一時ラフバ牢獄へ投獄されてしまう。他方、クドゥスィーも証人を獲得するため、カースィム・アルヒスニー Qāsim al-Ḥiṣnī なる人物をガザ地方に派遣するが、「一羽の鶏すら殺せぬような二人の人物しか、彼の要請には応じなかった」[*Izhār* 1 : 294]。857 年第 1 月 25 日 / 1453 年 2 月 4 日、ついにクドゥスィーはサンバーティーに誣告の事実を認めた。翌日、「悪を拡大させた」[*Izhār* 1 : 293] として、サンバーティーによりイブン・カザービルの釈放とクドゥスィーとカースィムの投獄、クドゥスィーに対する説教の禁止が命じられた。

クドゥスィーとカースィムがラフバ牢獄に投獄される様子を、ビカーイーは以下のように描写している。

それ（サンバーティーの裁定）により、二人はイブン・カザービルが [投獄されて] いたラフバ牢獄に投獄された。イブン・カザービルとミジュダルの住民 *ahl al-mijdal* からなる群衆 *khalq* は、牢獄の門まで [連行される] 二人に同行した。彼らはアブー・アルアッバース（クドゥスィー）に対し、「お前は故郷を荒廃に導いた、人間の恥め」と叫び、口汚く罵った。そしてカーディー（サンバーティー）とスルタン（ウスマーン, r. 1453）に対する祈願 *du'ā*、神の使徒——神が彼を祝福し、救いを授け給わんことを——に対する祈り *ṣalāt* の声を高らかにあげていた。彼らには大変な騒々しさがあり、また彼（クドゥスィー）には非難されるべき状況と、常軌を逸した振る舞いがあったのである [*Izhār* 1 : 295]。

クドゥスィーとカースィムは 4 日後の第 1 月 30 日 / 1453 年 2 月 9 日に釈放された。このように比較的短期間で釈放に至ったのはシャイフ・マドヤン *Shaykh Madyan* の仲裁によるとされるが、実際は賄賂 *rishwa* による取引があったという [*Izhār* 1 : 300]。

イブン・カザービル一派との抗争やクドゥスィーが告訴状を作成するに至った具体的経緯については、残念ながら推論するための材料が不足している。また、ナーズィル・アルハーッスのもとへ弟を派遣し、法廷闘争の舞台をカイロに移した理由も不明瞭だが、親族に有利な判決を期待しての行動と思われる。いずれにせよ、クドゥスィーが誣告罪に問われたこの事件は、故郷ミジュダルに大きな混乱と損害をもたらした。この事件が同時代ウラマーのクドゥスィーに対する否定的イメージを増幅させたことは明らかであり、「ワーイズの範となるべき資質に欠ける」とのサハーウィーの指摘は、このような彼の利に敏い一面を描写しているといえる。

ビカーイーがかつて友人であったクドゥスィーを評した言葉は辛辣を極めている。

この事件の解明により、すでに彼について知られていた諸事と併せ、彼の発言全体に嘘や中傷が含まれていること、彼はその様子のうちに少しの知性 *muska* もなく、宗教 *dīn* に対する理解が足らず、男気 *murū'a* を持ち合わせていないことが知れ渡った [*Izhār* 1 : 294]。

両者が以前激しい法廷論争を繰り広げたことに鑑みるに、ビカーイーによる評価を鵜呑みにはできないが、誣告という行為を彼の日常的な発言にみられる虚偽と関連づけて説明している点には注意を払っておく必要がある。

以上、五人の同時代ウラマーが残した人物評価を整理すると、まず、クドゥスィーは法学、法源学、ハディース学、コーラン注釈学、アラビア語学、古典詩、聖者伝などのイスラーム諸学に精通した伝統的知識人であり、エルサレムの指導的アーリムとして認知されていた。圧倒的な記憶力や雄弁性、聴衆の関心を引くことに長けていたとする記述は、彼のワーイズとしての資質を明示しているといえる。有力者への追従はパトロネージや公職を獲得するためと考えられ、ワーイズを含む当該時期におけるウラマーのあり方として珍しいものではないが²¹⁾、彼の言動にみられる軽率さや虚偽はアーリムとしての信頼性を著しく損なうものであり、カイロのウラマー社会における評価は必ずしも高くなかったようにみえる。上記のような人物像を踏まえ、人気説教師クドゥスィーのウラマー社会における位置取りに大きな影響を与えたとみられるいくつかの訴訟について、ヒジュラ暦 845 年の事件を中心に、以下、具体的な考察を加えていくことにしよう。

Ⅲ 有力ウラマーとの係争

エルサレム、ダマスカス、カイロなどで研鑽を積む傍ら、836/1432-33年にワーイズとしての活動を開始して以降、「彼(クドゥスィー)に関わる諸事は知れ渡り、当代のイブン・アルジャウズィーと謳われた」[Uns 2:141]。「ワーイズの範」として圧倒的影響力を行使した人物に匹敵すると見なされていた事実は、刮目に値しよう。

しかし、その活動は決して順風満帆なものではなかった。カイロにおけるクドゥスィーのワアズ集会について、イブン・ハジャルは次のような記述を残している。

カイロに行った彼は集会に多くの人々 jama', 特に女性 nisa' を集めたが、[そのことに批判的な] 人々 qawm が彼に対抗したため、マーリク派カーディーは女性を集めることを禁じた。また、彼がイマーム・マーリクについて言及したところ、彼(マーリク)の法学派の幾人かが彼(クドゥスィー)がマーリクを非難したと告発した nasaba ため、マーリク派カーディーは彼に一切の演説 kalām を禁じた。彼らはこの件を仲裁し shafa'ū, 彼(マーリク派カーディー)は彼(クドゥスィー)を許した [Inbā' 4:182]。

彼のワアズ集会をめぐる、カイロのマーリク派ウラマーによって二度の訴訟が起こされたことが確認できる。第一の訴訟は、敵対するウラマーが集会から女性を排除するようマーリ

21) Berkey 2001: 61.

ク派カーディーに働きかけを行っており、集会の形態を問題としている²²⁾。二件目はクドゥスィーがマーリク派法学の祖、マーリク・ブン・アナスの教説を批判したとして、説教の内容が争点となっている²³⁾。最終的に活動は許されたものの、この事件がクドゥスィーとカイロのマーリク派ウラマーとの関係を著しく悪化させたことは想像に難くない。

844/1440-41年、クドゥスィーは巡礼のためカイロを発った。*Inbā'*に「彼の集会には一部の貴顕も出席し、イエメンの人々からなる一団 *jamā'a min ahl al-Yaman* も参集した」とあるように [*Inbā'* 4 : 182], 彼はメッカにおいても精力的に説教活動を展開し、その人気は衰えることがなかった。さらにシャリーフのバラカート *Barakāt ibn Ḥasan ibn 'Ajlān* (d. 1455) をはじめとする複数の有力者によるパトロネージを勝ち得たことは、メッカにおける彼がワーズとしていかに華々しい成功を収めたかを物語っている [*Inbā'* 4 : 182-183, *Tibr*, 18]。

しかし翌845/1441-42年第8月、メッカのシャーフィイー派とマーリク派のカーディーがクドゥスィーに対する告訴状を提出したことで、状況は一転する。メッカの歴史家イブン・ファフド (1409-1480) は、事件の発端を次のように述べている。

彼はファトワーを作成し、着座して人々 *nās* に対する教授 *tadris* を行っていたが、法学者たちは彼 [の言動] を我慢していた。また、二人のカーディー、すなわちシャーフィイー派のヌワイリー *Amīn al-Dīn Abū al-Yaman al-Nuwayrī* と、マーリク派のイブン・アッザイン *Kamāl al-Dīn ibn al-Zayn* が、彼 (クドゥスィー) から彼 (イブン・アッザイン) のもとに伝わった演説に関してひどく腹を立てた。そこで彼を矯正 (タアズィール *ta'zīr*) 刑に処する旨の告訴状 *maḥḍar* が記された [*Ithāf* 4 : 172-173]²⁴⁾。

これに対しイブン・ハジャルは、「幾人かの法学者が彼を不当に扱い *taḥāmala*, 告訴状を作成、幾つかの件で告発し、マーリク派法学者に告訴状を要請するに至った」と述べ、クドゥスィーが犯したとされる罪を「[程度の] 最も低いものはタアズィール刑を必要とし、最も高いものは不信仰 *kufr* とする諸事件」として、事件の背景を説明している [*Inbā'* 4 : 182]²⁵⁾。

22) ワアズ集会は女性がイスラーム的知識に触れることのできる限られた機会の一つであったが、その参加をめぐっては中世を通じ活発な議論がなされている。女性の参加に否定的なウラマーが唱える論拠の大半は集会において男女が混在することの危険性であったが、彼らの一部は男性ワーズが女性に対し説教を行う行為そのものを好ましくないとした。しかし、女性ワーズ (ワイザ *wā'iza*) に「正統な」知識が欠如、あるいはワイザが「男性の権威を侵害」しているとして、女性が女性に対して説教を行う行為すら批判する論調も見られた。詳しくは Berkey 2001 : 31-32, 37 及び Lutfi : 115-116 を参照。

23) *Rawḍ* 729 : 120 a によると、クドゥスィーの説教集会には複数のマーリク派法学者が出席していたが、彼はマーリクについて度々言及していたという。

24) 同様の記述は *Inbā'* 4 : 182; *Tibr* : 17; *Nayl* 2 : 149; *Rawḍ* 729 : 120 a にもみられるが、カーディーの名前に言及があるのは *Ithāf* のみである。

25) *Tibr* : 18 にも同様の記述がある。

クドゥスィーが「不信仰」とされた理由について、史料から明確な判断材料を得ることはできないが、聖地メッカと巡礼中継都市でもあるカイロの情報交流の緊密さに鑑みれば、カイロのワアズ集会をめぐる情報が同派ウラマーのネットワークを通じて伝播していた可能性は高いと考えられる。しかし、エルサレムに地盤を持つアーリムのクドゥスィーがメッカの有力者によるパトロネージを獲得し、ワーイズとして大きな成功を収めたという事実も、事件と無関係ではないように思われる。

これら一連の訴訟事件は、先行研究で度々論じられてきた民間説教師の「統制」という問題を考える際、極めて興味深い事例といえよう。「正統な」イスラーム的知識から「逸脱」した民間説教師をいかに統制するかという問題は、中世ウラマーの抱えていた懸案の一つであり、これらの訴訟をその一幕として捉えることは可能であるようにも思われる。しかし、クドゥスィー自身が伝統的な知識の修得過程を経た有名アーリムであることから、カーディーによる統制の要因を彼の「正統な」知識の欠如に求めることはできない。また、ウラマーが対立関係にある人物を「不信仰」と喧伝する行為は、当該時期、しばしば観察されるものである²⁶⁾。さらに、メッカのウラマーの態度を「不当」とするイブン・ハジャルの記事にも十分な注意を払っておかねばならない。サハーウィーはこの訴訟を「彼の名声を伝える事件」と位置づけ、「説教がゆえに中傷される不幸が生じた」というイブン・アビー・ウザイブ Ibn Abi Udhayba (1416/17-1452) の言及を引いて説明している [Daw' 1 : 365]。すなわち、メッカの民衆や一部の名士層の支持を得て成功を収めた新来アーリムであるクドゥスィーに対し、危機感を募らせた地元ウラマーが彼の言動の危うさをとらえて「不信仰」と喧伝することにより、域内ウラマー社会内の勢力均衡を図ろうとしたのではないだろうか。ヒジュラ暦 845 年の訴訟事件は、ワーイズの「知識の正統性」を問題としたウラマーによる「統制」という単純な図式ではなく、メッカのウラマー社会における権力闘争が表出したものとして、より広い文脈で解釈すべきだろう。

クドゥスィーがイブン・アッザインによって木曜の夜から金曜礼拝が終わるまで拘束された後、彼のパトロンであったバラカートにより、両カーディーとの和解を目的とした会合が設けられた。イブン・ファフドは会合の顛末を以下のように記述している。

前述の者(クドゥスィー)が連れて来られ、「マーリク派カーディーに対する異議 da'wā がある」と述べた。するとシャーフィイー派 [カーディー] は彼を掴み、前述の者たち(出席者)の面前で彼の髭を掴んで打ちのめし、「災いのシャイフめ yā shaykh naḥṣ」と言った。そして彼のターバンを外してタアズィール刑を命じ、着座してワア

26) 例えば、797/1395年、ヤルブガー・アッサーリミー Yalbughā al-Sālīmī によるサイド・アッスアダー修道場改革でワクフ受給者から外されたハナフィー派法学者アッバーディー Aḥmad ibn Abū Bakr al-'Abbādi は、彼を不信仰者 kāfir と喧伝した。詳しくは長谷部 2003 : 133-145 を参照のこと。

ズを行なうことを禁じた。シャリーフは彼の訴状 *qiṣṣa* を寛大に扱い、この件に関する会合を散会させた [*Ithāf* 4 : 172]。

注目すべきは、クドゥスィーが無実を訴えるや否や、ヌワイリーが彼を打擲、罵倒することと言論を封じ、「無帽の状態」にした点である。マラティーが「その場で彼は笑いものにされ、非難を受けた」と述べているように [*Nayl* 2 : 149]、ヌワイリーの行動からは、雄弁なクドゥスィーに多くを語らせず、かつ列席していたメッカの名士たちの前で屈辱を与えるという意図が窺える。両者の対立は激しさを増し、イブン・ハジャルは「もしシャリーフが彼の訴訟 *qaḍiyya* を仲裁していなければ、事態はいっそう酷いものとなっていただろう」と評している [*Inbā'* 4 : 183]。クドゥスィーは会合後もハラーム・モスクでコーラン読誦法を教え、法勧告 *futyā* を記していたため、両カーディーは教授とファトワーの作成を禁じた [*Rawḍ* 729 : 120 a]²⁷⁾。

この訴訟でクドゥスィーの側に立ったのはバラカートのみであったが、彼は事件より3ヶ月前の845年第5月/1441年、スルタン・ジャクマク (r. 1438-53) によってメッカ太守 *amīr Makka* を罷免されていた。代わって就任した弟のアリー (d. 1449) は、参上したクドゥスィーに一瞥を投げることもすらくなく、不快感を露にしたという [*Ithāf* 4 : 173]。クドゥスィーの説教が事件の契機となったことは疑いないが、メッカ太守という強力な後ろ盾を失ったことも、間接的要因として考慮に入れる必要がある。

両カーディーによる裁定を不服としたクドゥスィーはスルタンへの直訴に向かったが、時を同じくしてアリーもカイロへ使者 *qāṣid* を派遣していた。クドゥスィーがカイロに到着したのは同年第9月22日/1442年2月2日であるが、使者はすでにアリーからの報告をジャクマクにもたらしていた。事件の詳細を知ったジャクマクは激昂したといい、その理由をイブン・ハジャルは以下のように記している。

使者がアリー・ブン・ハサンから伝えたところによると、彼(クドゥスィー)は彼(バラカート)に対して「[第四代カリフの]アリーは[初代カリフの]アブー・バクルよりも優位に立っている」と述べていたため、前任のシャリーフ(バラカート)は彼(クドゥスィー)の肩を持った。だが、アリー・ブン・ハサンがメッカ太守に任命された際、彼(クドゥスィー)がアリーのもとへ参集したことで、アリーは彼を変わり身の早い人間であると考えた。そこで彼に会い、「私はスンナ派の人間であり、バラカートはザイド派である」と言った [*Inbā'* 4 : 182-183]²⁸⁾。

27) *Daw'* 7 : 109-110 によると、クドゥスィーのミーアードで学んだイブン・トゥルトゥール Ibn Ṭurtūr (1407/08-1489) が、マールク派カーディーに対して説教の禁止を取り下げるよう請願を行なった。しかし、「命令はこの[クドゥスィーの]件に特化されているものだ」との返答があったため、彼自身はミーアードにおける活動を続けたという。

28) 同様の記事は *Tibr*, 18 にもみられる。

10世紀以降、メッカのシャリーフ政権はザイド派を奉じていたが、R. モーテルはカルカシャンディー（1355-1418）による言及をシャリーフのザイド派信仰を示す最後の史料と位置づけ、ヒジュラ暦9世紀前半までに完全にスンナ派信仰へ移行したと結論付けた[Mortel 1987: 468]。しかし、カルカシャンディーの死後24年も遅れて発生したこの訴訟事件は、従来スンナ派と考えられていたバラカートがザイド派信仰を堅持していた可能性を示唆している。続いてメッカ太守に就任したアリーがスンナ派への帰属を表明していることから、むしろこの時期をスンナ派信仰への転換期として捉えるべきであると思われる。スンナ派を自任していたアリーにとって、無定見な発言で権力に取り入ろうとするクドゥスィーは到底容認しがたく、そのような人物が自らの着任を祝うために参上したとして、怒りを禁じ得なかったのである。バラカートの罷免について、モーテルは政権にとってアリーがより与し易い人物であったと説明しているが[Mortel 1995: 5]、それはシャリーフの宗派という問題と関係付けて理解する必要があるだろう。ザイド派的教説を口にすることでメッカの実力者バラカートの保護を得ようとしたクドゥスィーの意図は明らかだが、人気ワーズとしての彼はバラカートにとっても十分な利用価値があったため、弁明の機会を与えたとみられる。

自らの正当性を訴えるクドゥスィーはカーディー法廷の判決を不服とし、スルタン主宰のマザーリム法廷へ直訴に向かった。この時期のマザーリム法廷が役人の不正（ズルム *zulm*）を裁く上級審としての機能を果たしていたことを考慮すれば、両カーディーによる告訴の法的根拠を希薄とする前述のイブン・ハジャルの指摘も現実味を帯びてくる²⁹⁾。上訴に向かったクドゥスィーには、マザーリム法廷における勝訴の見通しがあったと考えられる。だがカイロでスルトンの寵臣たち *khawāṣṣ* と面会した際、「彼らは沈黙するよう忠告し」、それを受けたクドゥスィーは「不本意ながら黙った」という [*Ithāf* 4: 173]。アリーからの報告によりスルタンが激怒したことを知った彼らは、これ以上事を荒立てるのは得策ではないとクドゥスィーに助言し、彼は最終的に上訴を断念せざるを得なかったのである。

ヒジュラ暦845年の訴訟により、メッカにおけるクドゥスィーの活動が困難になったことは確かであろう。しかし、バラカートが5年後の1447年に復任し、1455年に亡くなるまでその地位にあったため、この間にクドゥスィーが再びワーズとしてメッカに戻っていた可能性も否定できない。いずれにしても、事件以降もクドゥスィーは前述のヤシュバク・アルファキーフ、イブン・ムズヒルら有力者によるパトロネージのもと、カイロとエルサレムを拠点にワーズとしての活動を続けることになる³⁰⁾。

29) マムルーク朝期のマザーリム法廷については、Nielsen を見よ。

30) クドゥスィーはヤシュバク・アルファキーフ、イブン・ムズヒルのもとを足繫く訪れては説教を行い、両名はそれを喜んだという [*Daw'* 1: 366]。

お わ り に

クドゥッシーは晩年をカイロで過ごしていたが、転倒による足の骨折をきっかけに気力が衰え、病に臥すようになった。彼は870年第6月26日/1466年2月12日、イブン・タグリー・ビルディーに従えば57歳で波乱に満ちた生涯を閉じたが、「亡くなるまでワアズとタズキールを行ない続けた」[*Rawḍ* 729, 120 b] という。

34年に及ぶワーイズとしての活動は、生来の優れた記憶力、長年の研鑽によって蓄積された学識、そして卓越したワアズの技術によって支えられていた。先行研究におけるワーイズは「正統な」イスラーム的知識を持たない、ウラマーの範疇から外れた存在として論じられる傾向にあったが、このように高度な学識を備えたワーイズを確認し得たことは、本稿の収穫といってよい。ワアズを禁じ、あるいは弁明の機会を与えないことでクドゥッシーの言論を封じようとした対立ウラマーの態度からは、域内ウラマー社会における勢力の均衡を保とうとする意図が観察される。彼の経験した社会的コンフリクトは、ウラマーによる権力闘争の一場面としても理解されるべきだろう。彼は民衆に対して多大なる影響力を行使し、各地の有力者によるパトロネージを受け、富を蓄えた。その説教は民衆のイスラーム観を反映した題材によって構成されていたが、メッカの最有力者であったバラカートの歓心を買うためにザイド派教義に沿った発言をするなど、パトロネージ関係がワーイズの言説に影響を与えている点も見逃せない。マムルーク朝後期の人気ワーイズ・クドゥッシーは、イスラームに対する民衆の期待とパトロンの意向という二方向からの要求がせめぎ合う中で存在し、その双方を満たすことで大きな成功を収め得たのである。

本稿では15世紀のマシュリク諸都市で活躍した一個人のワーイズに焦点を当て、社会的諸関係に注目しつつその実像を考察したが、今後は時代的、地域的に視野を広げ、こうしたワーイズの実態研究をさらに積み重ねていかねばならない。そして、個別の諸事例を比較・検討した上で、マムルーク朝期のワーイズ全体についての総合的議論へと移行していくべきであろう。このような作業の中で、クドゥッシーがこの時代のワーイズの総体においていかなる位置にあったのかも、一層明瞭となるに違いない。

参 考 文 献

- Badā'ī*: Ibn Iyās, *Badā'ī al-zuhūr fī waqā'ī al-duhūr*, 5 vols., Wiesbaden, 1960–75.
Ḍaw': al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-lāmi' li-ahl al-qarn al-tāsi'*, 12 vols., Cairo, 1934–36.
Inbā': Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-ghumr bi-abnā' al-'umr*, 4 vols., Cairo, 1969–98.
Ithāf: Ibn Fahd, *Ithāf al-warā bi-akhbār Umm al-Qurā*, 5 vols., Mecca, 1983–90.
Izhār: al-Biqā'ī, *Izhār al-'aṣr li-asrār ahl al-'aṣr: ta'rīkh al-Biqā'ī*, 3 vols., Riyadh, 1992–93.

- Ḥawādīth*: Ibn al-Ḥimṣī, *Ḥawādīth al-zamān wa wafayāt al-shuyūkh wa'l-aqrān*, Beirut and Sayda, 3 vols., 1999.
- Kawākib*: al-Ghazzī, *al-Kawākib al-sā'ira bi-a'yān al-mi'a al-'āshira*, 3 vols., Beirut, 1997.
- Mu'jam*: Ya'qūt, *Mu'jam al-buldān*, 5 vols., Beirut, 1979.
- Nayl*: al-Malaṭī, *Nayl al-amal fī dhayl al-duwal*, 9 vols., Beirut and Sayda, 2002.
- Nujūm*: Ibn Taghrī Birdī, *al-Nujūm al-zāhira fī mulūk Miṣr wa'l-Qāhira*, 16 vols., Cairo, 1963 – 72.
- Rawḍ*: al-Malaṭī, *al-Rawḍ al-bāsim fī ḥawādīth al-'umr wa'l-tarājim*, Vatican Library, Arabo.
- Tibr*: al-Sakhāwī, *al-Tibr al-masbūk fī dhayl al-sulūk*, Cairo, 1972.
- Uns*: al-'Ulaymī, *al-Uns al-jalīl bi-ta'rikh al-Quds wa'l-Khalīl*, 2 vols., Amman, 1999.
- Wajīz*: al-Sakhāwī, *Wajīz al-kalām fī al-dhayl 'alā duwal al-islām*, 4 vols., Beirut, 1995.
- 'Athamina, K. (1992) Al-Qaṣaṣ: Its Emergence, Religious Origin and its Socio-Political Impact on Early Muslim Society, *SI* 76, 53 – 74.
- Berkey, J. (2001) *Popular Preaching and Religious Authority in the Medieval Islamic Near East*, Seattle and London.
- Berkey, J. (2002) Storytelling, Preaching, and Power in Mamlūk Cairo, *Mamlūk Studies Review* 4, 53 – 73.
- Brockelmann, C. (1996) *Geschichte der Arabischen Litteratur*, 5 vols., Leiden.
- Gibb, H. AL-BULKĪNĪ *EI*2 1, 1308 – 1309.
- Goldziher, I. (1971) The Ḥadīth as a Means of Edification and Entertainment, *Muslim Studies* 2 (trans. Barber, C. & S. Stern), London, 145 – 163.
- 長谷部史彦 (2003) ヤルブガー・アッ=サーリミー —— 後期マムルーク朝ウスターダールの生涯 (2) 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』35, 133 – 145.
- 長谷部史彦 (2004) マハッラ・クブラー蜂起の諸相 『オリエント』46 (2), 161 – 179.
- 伊藤隆郎 (1996) 一四世紀末—一六世紀初頭エジプトの大カーディとその有力家系 『史林』79 (3), 315 – 359.
- Li Guo (2001) Al-Biqā't's Chronicle: A Fifteenth Century Learned Man's Reflection on His Time and World. In: Kennedy, H. (ed.), *The Historiography of Islamic Egypt (C. 950–1800)*, Leiden, Boston and Köln, 121 – 148.
- Lutfi, H. (1991) Manners and Customs of Fourteenth-Century Cairene Women: Female Anarchy versus Male Shar'i Order in Muslim Prescriptive Treatises. In: Keddie, N. & B. Baron (eds.), *Women in Middle Eastern History*, New Haven, 99 – 121.
- Martel-Thoumian, B. (1991) *Les Civils et l'Administration dans l'État Militaire Mamlūk*, Damas.
- 三浦 徹 (1989) マムルーク朝末期の都市社会 —— ダマスクスを中心に —— 『史学雑誌』98 (1), 1 – 45.

- Mortel, R. (1987) Zaydi Shi'ism and the Ḥasanid Sharifs of Mecca, *IJMES* 19 (4), 455–472.
- Mortel, R. (1995) Aspects of Mamlūk Relations with Jedda during the Fifteenth Century: The Case of Timrāz al-Mu'ayyadī, *Journal of Islamic Studies* 6 (1), 1–13.
- Nielsen, J. (1985) *Secular Justice in an Islamic State: Maẓālim under the Bahri Mamlūks 662/1264–789/1387*, Istanbul.
- Pedersen, J. (1948) The Islamic Preacher: Wā'iz, Mudhakkir, Qāṣṣ. In: Löwinger, S. & J. Somogyi (eds.), *Ignace Goldziher Memorial Volume* 1, Budapest, 226–251.
- Pedersen, J. (1953) The Criticism of the Islamic Preacher, *Die Welt des Islam* 2, 215–231.
- Popper, W. (1956) Sakhāwī's Criticism of Ibn Taghrī Birdī, *Studi Orientalistici in Onore di Giorgio Levidella Vida* 2, Rome, 371–389.
- Schacht, J. IBN KĀDĪ SHUHBA *EP* 3, 814.
- 下山伴子 (2005) 書評と紹介: ジョナサン・P・バーキー 『中世イスラーム近東における民衆の説教と宗教的権威』 『イスラム世界』 64, 123–127.
- Shoshan, B. (1993) *Popular Culture in Medieval Cairo*, Cambridge.
- Shoshan, B. (2006) Popular Sufi Sermons in Late Mamluk Egypt. In: Wasserstein, D. & A. Ayalon (eds.), *Mamluks and Ottomans: Studies in Honour of Michael Winter*, New York, 106–113.
- Swartz, M. (1983) The Rules of the Popular Preaching in Twelfth-Century Baghdad, According to Ibn al-Jawzī. In: Makdisi, G. et al. (eds.), *Predication et Propagande au Moyen Age: Islam, Byzance, Occident*, Paris, 223–239.
- Swartz, M. (1986) *Ibn al-Jawzī's Kitāb al-Quṣṣāṣ wa'l-Mudhakkirin*, Beirut.
- Talmon-Heller, D. (2007) *Islamic Piety in Medieval Syria: Mosques, Cemeteries and Sermons under the Zangids and Ayyūbids (1146–1260)*, Leiden and Boston.
- 東長 靖 (1990) マムルーク朝末期のタサウフをめぐる論争 『イスラム世界』 33, 51–72.
- 塚田絵里奈 (2006) 書評 Jonathan P. Berkey, *Popular Preaching and Religious Authority in the Medieval Islamic Near East* 『オリエント』 48 (2), 173–178.

(慶應義塾大学大学院文学研究科/カイロ大学大学院文学研究科)